「伝承としての言葉」から考える核なき未来と平和

松本桜季

■はじめに

1945年8月9日に長崎県に原爆が投下されてから今年で78年が経過した。被爆者の数が減少し続ける中で、このような悲惨な出来事を二度とくり返さないために残された「伝承者」である私たち若い世代ができることは何なのだろうか。

戦争の悲惨さや原子爆弾という核兵器の恐ろしさを通して考える「現代の私たちにできること、私たちの価値とは何か」に関心を抱いた千葉県の大学生が自主企画ゼミナールを立ち上げ、長崎県を訪れ、長崎原爆資料館や長崎原爆死没者追悼平和祈念館、被爆者による被爆体験講和などを主にフィールドワークを実施した。最新の核抑止や核兵器がもたらす地球環境の破壊などについての具体的な知見を用いて論じることはできないが、「被爆当事者の言葉」の観点から「核なき未来」を構想するための基本となる考え方を探る。

■二つの言葉

詩人であり批評家である若松英輔は、「心は、いつも二つの糧を求めている。一つは他者から投げかけられる言葉、もう一つは自らの内面から湧き上がる自分自身の言葉である」(若松 1頁)と言葉がもつ二つの側面について指摘している。この文章を私は戦争中における「二つの糧」に置き換えた。まず、「他者から投げかけられる言葉」を当時日本政府が国民へ投げかけ、戦意高揚や戦況などを伝えるために使用した政治性の高い言葉であると解釈し、つぎに「自らの内面から湧き上がる自分自身の言葉」を被爆者が戦時中に感じた経験や感情を思いのままに綴り、そして後世にまで引き継ぐことのできる、リアルで当事者性の高い言葉であるという解釈をした。

当事者が「他者(日本政府など)から投げかけられた言葉」は、主に「日本政府から出された標語やプロパガンダ」であり、具体的には「欲しがりません、勝つまでは」や「ぜいたくは敵だ」(被爆者による被爆講和)など戦争意欲を倍増させるような標語的な言葉が挙げられると考える。そしてこういった強い印象を持ち、一瞬で全国民を戦争へと駆り立ててしまう短くて明確な「言葉」を毎日口にしたり目にしたりすることは、当事者にとっては「当たり前の生活であった」(被爆者による被爆講和)と考えることができる。「他者から投げかけられる言葉」は、他人からもらうアドバイスや、自分自身への励ましや支えになるような、本来比較的ポジティブな方向に捉えられるべきだが、戦時においてはこういった励ましや支えを、戦争意欲や愛国心などを表現する言葉と抱き合わされて使用されてきたと考える。

一方で「内面から湧き上がる自分自身の言葉」は、「当事者が自由に表現することのできた、感情をあらわす言葉」であると考える。具体的には、「のどが乾いてたまりませんでした」や「妹が家の下敷きに」(原爆資料館 被爆者の証言)など、原爆投下直後一変した当事者の生活や、当事者がさまざまな感情を伝えるために使用され、そこに誰かを洗脳したりある一方向に持っていこうという深い意図のない「他者に伝えるために使用される言葉」であると考える。実際に私が長崎原爆資料館を訪れ、この証言内にある言葉から受けた印象はとても大きく、展示内の「母」や「水」「家族」など、現代の私たちが当たり前のように使っている言葉とはまるで違う単語のような、1つ1つの言葉の重みが全く違うという印象を受けた。一発の原子爆弾が、長崎県内の何万人もの命

を奪い、遺族の方々を今もなお苦しめ続けているという事実に私は憤りを覚えると同時に、被爆者の方々が語る言葉の生々しさから、核兵器の恐ろしさを身体で感じ取ることができた。したがって、当事者による「内面から湧き上がる言葉」こそ、当事者が経験した、日常を一瞬にして崩壊させた核兵器の脅威を表現する「生きた」遺品であり、私たちがこの悲惨な出来事を世代を超えて伝承すべきものであると考える。

■伝承としての言葉と核なき未来

原爆投下から78年が経過し、核兵器や戦争の悲惨さを考える機会が減少しつつある現在において、核なき未来と平和を構想するために、一瞬で日常を壊し得る核兵器の残酷さと戦争が当事者にもたらした影響を考えることは重要なことだと考える。そのために、原点である被爆体験を伝える当事者の言葉といま一度向き合い、残された私たち若い世代が感じた生の気持ちや感情を言語化し継承していくことが、大切な一歩になるのである。

参考文献・資料

若松英輔『往復書簡　悲しみがことばをつむぐとき』岩波書店、2015
長崎原爆資料館 2023年6月17日訪問
国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館 2023年6月18日訪問
被爆者 三瀬清一郎さんによる被爆体験講話 2023年6月17日実施